

故実三禮作法俗解

桂上枝著

特43

663

014008-000-3

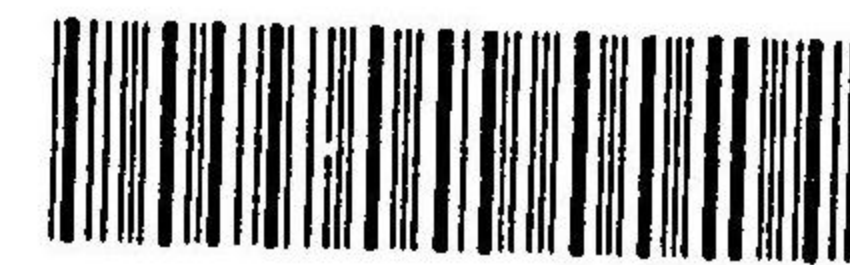
特43-663

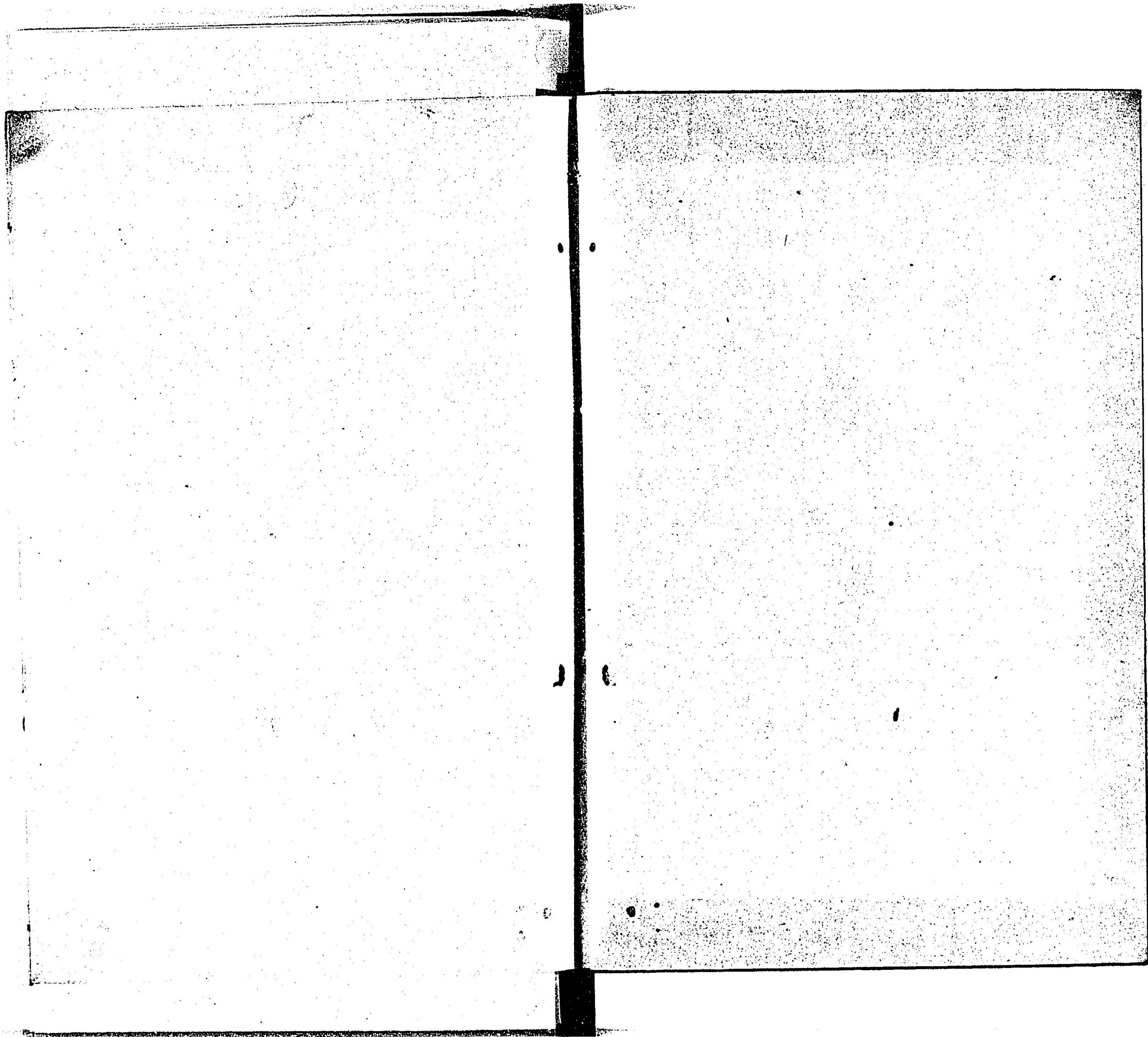
故実三禮作法俗解

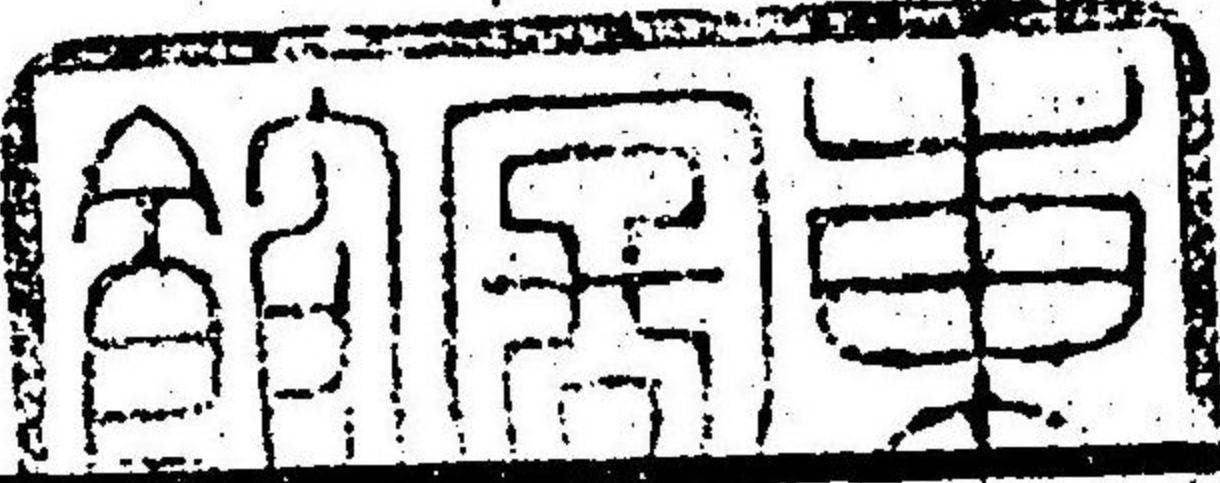
桂上枝/著

M16

ABB-0260







故實三礼作法俗解

大凡心伐正しくして而る後身を脩むるは順たれとも又身を脩めて而る後心を正しくしる事もありある者也故神聖礼ちふ者を立て身を脩むる為の器械とはなすたより然るに此世の如きは志あるちふ人少むと雖も皆大きくあきわきをのそ

事として礼儀などいふ者は行なをむ
りのごとくせむを故をれ治ありて後も須
吏の間は大司細僅を顧りみまな
といふ説はやりて礼儀をたろるるに
さる弊倭し漢も古より多し是民
をして礼なごりめ心を乱し治を永
くしめらる媒たろき然るに檄卷
も長き吾 天皇伊弉く此も大

御心を注けたまふは近年比は
ほ礼儀の事成たきて教つあまひ
ぬれ是を天位の天地の共常石に
堅石に榮はまじつき験もなも
りけるはれとも此の教いまた級あり
る吾越の国もは行たろは甚て大方
人の表も立つき神官教職はら此
を行なはは得ある者と思

へる人は甚少なきは誠も慨多き
限るる有ける然るに吾年比相語
らへる久方此月の桂氏伊
天皇を尊み神を敬まへる心ハ深海
松の深きはましく夙く此は目を注け
られて年比身自も物一人も物させ
まほしく思ほしてあられく此度此
の故實三礼作法俗解なる書をへん

あふして吾も序とよむ課とおぼさる
故吾はもよ文の道は甚拙くて倭
文たまたみ数にはあぬものかゝ一は此
書櫻木も移らば同一つかさの人等
此為ともなむ事を思ひ一はし
此心は背かむ事哉憚りてかくは記
しつるなりけり

いふ年ねむつき
とをさうりむとせと
いふ年ねむつき

田村彌平

故實三禮作法俗解

桂 上枝謹述

神明に奉仕する人を見事に故實の作法を知り
たか人の少れきやうきたき業れるるゝえおもく
神を祭るも崇敬の極無上の大典まほり其事業
小粗かゆやいぬら恥るきよやれい文やさて神
祭の度も何々の祭典も何々の神以鎮祭し祭式
ら禊禊の行事よて大麻塩湯神饌獻撤等の順序

ら皆入此熟知する所れも其前ふもいぬ如く故
実の所作を辨ひるるを尋ねられりも其故実
の作法を知らずして其式を執行するは剣道を
学ぬ人其形といふを学んぬて其術を較
る試るや一般小く規矩を知らず可ぬ心也
し先づ三種の禮といふは揖拜稽顙是れり今
人も大なる拜に輕重の差別あるを如く心
得る人多かりきるも其て尊位を敬する小闕

く可なり其は古法れりや
揖と云ふ祭式の書をよみ立揖或は番揖次小坐揖
なりある揖はよみ此揖を今も拜の輕きも
此と云ふ心得て俗禮小下輩の者を遇ふ所の形
容も其大なる誤謬といふゆへに揖は面頭を垂
き其腰を折るまのをも其なりて頭を傾く者
ら其形はぬりて委しくいふる扇を双手小
て持ち手元を下腹の帯の紐をとり當て扇の先

を少しく下り手元を少しく上げて腰を折て屈
むれも起揚る時手元を少く下けて扇の先を少
しく上げて原小復るれも粗し屈む時を緩小し
て起る時も少く早るる為し多着座の時右
の膝を少し引殘して揖し起坐の時先の膝を
少し引らちて揖する土を故実南里
拜も祭式に書きたる小再拜兩段或ハ一拜拍手四
拜八開手れ少ある拜のよきにく

再拜兩段や四拜四拍手れを少しい又四
拜二拍手れを少しいゆ草小拍手とあるは則
手を二片拍事れとて又二拍手とある所
も何れも單小拍手やあるは一か拍も少
くあるとれ説もあれや其れ所作小拍も少
くあれきら此所も少く著き也
其故実ハ冠頭地を去る事三寸とありて兩手小
て扇を持ち坐したる膝の前小居る扇の先を地

よる二寸許り持ちある両手の元を斜り下けて
地へ附け静小頭を下ゆれり

屈む間も三息を度なり

但し頸を折ら文して屈むへきとのあり

頸や襟の離れさなかち注意をなす

頸の折れて冠頭の地に附くは鳥の泥を啄むの
状れりとして古人は大小忌む所も尻の高きも
尤嫌ふ所れり其餘は練習して熟知するべし

誓願の拜の後起坐の前小必と為るべきの禮れ
る但拜後の誓願を吉禮といひ誓願後の拜を凶
禮といひて此凶禮は蒸祭等小用ゆはの禮にて
誓願して後り拜するは吉禮なり

此の吉禮や凶禮との差別を知らざるは時を
大小識者の嗤笑を招き笑し用意あるへは
よせぬなり

はて誓願とも面の地へ下ゆをいふは額よりて

堅上に額ををり付て所謂平身低頭の姿小似く俗の平伏小近おれとと平伏やら可多些しく異ぬ

以上三種の禮式の所作を作法故実を抄録して俗語もて記せぬるべく作法故実の書寫に中昔風の漢文ふて容易くよみかゝく解しか多き書ふべく其書ハありぬの良に識者を深く考究せ及きとせぬやせぬ青年輩ハかゝる書なと

は迂遠なるもれと着過としもれらかゝる故実の廢れゆく由多しれはや本書り多舞蹈膝行膝退徐歩練歩遅練履練平伏敬折蹲居遠巡屈行逆行等の故實も載たれとそれらも朝廷の大禮小非なるも切り小普通の禮典に用るもの小是非なきら省き

る以上小簡短なる一冊帙の能く載とる所ありとせぬりするも膝行の事おとら大か

も今の人此為ふすしりてえらしとせられ
うひく三禮の外は省き初めなり
前條述る所を悉く舊説を俗語もて抄略したる
も此おしく聊も自説ハ如へはふれり云しす
しきおれをあきと其ハ字義の出所名義の有證
ととより編成して追て刊行せむも此をせれと
急務れは今たゞ其至要のみを初學の
心中あおの

おれを字のあきしきとせ
も愛はあれしきあのおれおのれおの辛く
して解し得たあきとせしきとせ
あれしあ大のおれ人たあ其式知り
はし起居進退の與動其規矩小協をさる
あこれ多く見ゆあきとせしきとのあきと
故實を練習せざるの階梯小との老婆心より書
いておれりより固より博識の大人等の目を

煩々心也予もあはれ者官諸君も此意を諒
せられし時より明治十五年十一月廿日かくり
し越後國中蒲原郡新津町の傍山なる秋葉神社
小仕奉る神官桂上枝平朝臣重輔に

明治十六年二月 出版御届
同 年三月 発行

定價金拾錢

著者兼出板人
新潟縣士族

桂 一 枝

越後國中蒲原郡田家村
番百子八番地住

新潟縣中蒲原郡新津町

發賣 神道事務支局

